# 姉はおしまい

世界歴
未整理シリーズ

1

《壱》

時は未来。

主たる燃料が化石燃料から電気エネルギーに変わっても、残念ながら車やバイクを宙に浮かす技術は未だ実用化に至らず、漫画に出てくるような家庭用の青いネコ型ロボも完成していない。

しかし異星人、つまりは宇宙人の存在は公とされ、人類は様々な星と交流を持つように成った。

だが何事にもメリットとデメリットというものはある。

星間交流、貿易が盛んになるほど、この星を訪れる宇宙海賊や犯罪者の数は増加の一途を辿った。

そして今日もまた、世界の何処かで犯罪者達が暴れていた。

『わーっはっはっはっ！ 聴くが良い、青き星の民よ！ 私の名はカーヤ・イナミナ！ 近い内に全宇宙を掌握し、絶対王者となる者じゃ！』

何処かにある町。

『尾ノ枝町（おのえちょう）』上空に、ドーム球場を小さくした様な物体が、派手派手しい光を放ちながら飛来した。

世間一般に言うところの未確認飛行物体。

ＵＦＯという奴だ。

『光栄に思うが良い。こたび、厳選なるダーツ抽選の結果、この辺境の星に拠点を築く事となった。手始めに、この小さな島国を支配下に置き、全銀河掌握の要とする！ 抵抗しても構わんがぁ、するだけ無駄じゃぞ？ なにせこの艦に積まれた兵器は、どれも宇宙ブラックマーケットで買った最新型じゃからのう！ さぁ、大人しく降伏するが良い！』

ＵＦＯの上部から飛び出し、拡声器(と思われる物体)から、高圧的な少女の声が町中に響き渡った。

ところが、尾ノ枝町の人々は空を見上げようとしない。

いや、全くの無反応という訳では無いのだが、目線を軽く向ける程度。

住宅街の主婦達はいつまでも世間話に花を咲かせ、学校の子供達は昼休みのサッカーにいそしみ、杖をつくお爺さんはヨロヨロと散歩を続ける。

いたってのどかな、平日の昼下がりだ。

『…き、聞こえておらんのか？』
あまりにも注目されない現状に、声の主は戸惑いを隠せない。

『お、おかしいのぉ…。何度もリハーサルしたから、大丈夫なはずじゃが…。言語翻訳機はぁ……、うむ、この前のように起動し忘れてはおらぬ。ミスは無いはずじゃ。…ぐぬぬ、ならば何故じゃ！ 何故に無視される！』

「あ～、無駄無駄」
『おぉ、何奴じゃ！』
ようやく得られた反応に、右往左往していたＵＦＯは嬉々として急ブレーキを掛けた。
素早く旋回し、声のした方向に船首を向ける。

そこに居たのは、実用性重視の服装に身を包み、健康的な黒髪と、これまた健康的な体つきをした、普通の青年だった。

宙に浮いている事を除けば。
その手には菓子パンと紙パック牛乳。

『ほぅ、殊勝な心掛けじゃな。早速捧げ物を持って来るとは』
「ンな訳あるか、これは俺の昼食だ」
『そ、そうなのか？ 残念じゃな…』
拡声器の声が物悲しげにトーンを落とす。

「何だ、腹減ってんのか？」
「な、何を言う！ まさかこの私が、空腹に堪えかねて、たまたま一番近いこの島国を支配しに来たとでも言うつもりか！」
あからさまな動揺が、語るに落ちていた。

「うわ、マジでそんな理由かよ…。無いわー…」
『ち、違う！ 違うぞ！ 断じて違う！』
つっかえつっかえで否定しているが、よくよく聞けば『グーッ』と腹の音が重なって聞こえる。

「減ってんだな。…仕方ねぇな、食うか？」
『ふ、フン！ その様な粗末な食べ物…』
「要らないのか？」
『いる！』

ＵＦＯから二本のロボットアームが飛び出し、パンと牛乳を青年の手から素早くかっさらう。
二点を収容して間もなくすると、運転手はマイクの場所から離れたらしい。
拡声器からは、少し離れた位置でガチャガチャと動く音がする。

『あぁ、食料じゃ！ 三日ぶりの食料じゃぁ～』
間もなく、涙ぐむ心底嬉しそうな声が聞こえてくる。

「お前、犯罪者に成り立ての新人だろ？」
青年がそう問い掛けると『ガシャーンッ！』とアルミのお盆か何かを落としたような音が響いた。
図星だったようだ。

「どうせ装備に金かけすぎて、生活費も使っちゃった口だろ」
『な、何故それを…。さては貴様、エスパーじゃな！』
「否定はしないけど、読心系の能力は持ってないから。それと、今時そんな演説でビビる人なんか居ないぞ？」
『そ、そうなのか？』

「考えてもみろ。このご時世、お前みたいな連中が現れるのなんて日常茶飯事だぞ？ もうみんな、慣れちゃってるんだよ」
『成る程のぉ。慣れとは恐ろしいものじゃな…』
口に物を含んだ状態でモゴモゴと感心する声。
次いで液体を飲む音が聞こえ、最後に『はぁ～』と満足げなため息が発せられた。

「食べきったか？」
『うむ、満腹じゃ。残りは備蓄庫に、』
「成らばよし。そんじゃ、…覚悟しろ」
おもむろにＵＦＯに近づいた青年は、右手を後ろに引く。

『へ？』
「加減してやっから、…出直して来い！」
青年は引いた腕を、ＵＦＯめがけて力一杯突き出した。
拳を受けたＵＦＯには凄まじい衝撃が加わり、『にょぁああ！』と情けない叫び声を上げながら、空の彼方へと飛んでいってしまった。

「う～ん、我ながら最長飛距離記録更新かな？」

ＵＦＯの飛んで行った方角を見つめ、青年は満足そうに頷いた。

「お～い、イチロ～！」

不意の呼びかけに、イチローこと、時翔（ときかけ）一郎（いちろう）は声の方へと目線を向ける。

彼の眼下。

一番近くに立っている電柱の上で、一人の人物が手を振っていた。

女の子らしい可愛らしい容姿のその人物は、腹部に変わった柄の付いたフード付きトレーナーに身を包み、器用に電柱の天辺に座っている。

「遅いぞヒカル、何やってたんだ」

イチローはヒカルこと、蘇我（そが）晃（ひかる）に文句を言うと、地上へと舞い降りる。

ヒカルはそれを確認すると電柱から飛び降りる。

膝を胸に引付けると、体をクルクル回転させながら彼の前で華麗に着地。

…する予定だったようだが、着地の瞬間にバランスを崩して尻餅をついた。

イチローが呆れて手を差し伸べると、ヒカルは苦笑しながらその手を利用して立ち上がった。

「ゴメンゴメン。来る途中で、道に迷ったお婆さんを助けたら『おれい』って事でお茶に誘われて、のほほ～んとしてたら遅れちゃたよ」

「『のほほ～ん』が余計だ。あのなぁ、もう片付いたから良いけど、ヒカルは『パル』としての自覚が…」

「おぉ、流石！ 何時もながら仕事が速いねぇ。ヨッ！『最強の矛！』」

「ま、まぁな」

不意に褒められ、小言を飲み込むイチロー。

おだてられ、腰に手を当てながら得意げな顔をしている。

「んで、捕まえた犯罪者は？」

「『…捕まえた？』」

だがヒカルの発言に、イチローの誇らしげな笑顔が一変、

困惑へと変わった。

「いや、だから進級課題。『宇宙犯罪者を捕まえる』」

「……あああああ！」

イチローが頭を抱えて叫んだ断末魔のような叫びの方が、尾ノ枝町の人々の関心を集めた。